

高校創成一カ年の思い出とその発展

宮本 昂

高校創成の思い出と書いたが、私が本学園に奉職したのは昭和三十二年で、ちょうど広島県可部女子高等学校が設立された年で、「私の就任一カ年の思い出」といった方が適切なような気がします。

ある会社をやめて家でぶらぶらしていたときに、数学の教師としてお話しただいて、武田ミキ先生にお会いしたが、なにぶんにも全くの未経験者で、大きな不安を感じていました。父が永年、小学校の校長をしていて（その当時はすでに退職していました）、子供の頃から少しは教員の生活を見てきましたが、果たして女子高校の教員がとまるのか、全く自信のないままに、本学園教員としてのスタートをきることになったのです。

当時の学校長であった武田学園長先生から、教育の理想論・教師のあり方・心構えなどについていろいろと聞かされ、これはえらいことになったと思ったものでした。

しかしながら、後戻りはできませんので「まあなんとかなるだろう」と度胸を握え、教員生活の第一歩を踏み出したわけです。当時私は三十三歳でしたが、何も彼もが新しい事で戸まどうことも多かったです。校長先生のきびしいなかにもあたたかいご指導を得て、なんとか日々の学校生活にもだんだん慣れてきました。

昭和二十三年に可部女子専門学校として発足して約十年、ちょうどその年に可部女子高等学校が誕生していました。その一年A組の学級担任を命ぜられ、毎日毎日がとにかく無我夢中の生活でした。可部女専の生徒一八二名、高

校生徒は一年生一二〇名、専門学校からの編入生の二年生が三十七名、計三三九名で、校舎は二階建一棟、平舎二棟、その中の一棟は寮と教室を兼ねており、朝、寮生の食事が終わると夜具などを片づけて教室に早変わり、夜になると再び寮生の憩いの場となるという状態でした。

学校行事を行う場合も、現在のような立派な体育館があるわけではなく、式などのときは、三教室に仕切られていた教室の間の仕切戸を取りはずして舞台をつくって式場とし、終わればまた大いそぎで教室にもどして授業をしたものでした。当時の学校所在地は、可部駅の西側に国道五四号線をはさんで大和重工があります、その会社の東側一部と現在の道路、それに線路にいたる東側、あわせて一三六〇坪（これはもとの中原小学校跡ですが）、可部町一五六一番地にあつたわけです。

しかしその前年度頃から中島地区（現在の安佐市民病院）への移転計画がすすめられて、約二万三千平方メートルの校地の確保ができていました。校地といっても、当時の中島地区は広々とした農地ばかりで、とても今では想像もできないような閑散とした場所でした。校舎（第一校舎といっていた）一棟を建築するための敷地だけが整地されており、その他は、畑や田んぼ、また一部は河原のようなところばかりでした。一年後を目標に、新校地への移転が計画されていたのですが、取りあえず、われわれの手で運動場を造らうということになり、当時敷地の東側半分が畠、西側が田んぼになっていましたが、その畠の部分が運動場候補地になりました。その運動場を造る責任者として私にやるようにということになり、また一つ大変な仕事を引き受けることになりました。もちろん全然経験のない素人です、何から手をつけていいのかさっぱりわからなかったのですが、お断りすれば例によって「なせば成る」といってはねつけられることがわかっていますので、自分なりに計画をたててやり始めました。

可部駅のところの校地から中島校地に至る道が、中島の踏切りから校地の北の端に通じる今ではかなり広い舗装道

路ができていますが、それが当時は狭い約三十センチ位の農道で、而もただ一つの道だったので。まず、これを人がまともに歩けるようにしなければと思ひまして、全生徒が一列にならんで、それぞれの受持場所を定めてほとんど手作業で八十センチ位の道を作りました。もちろん、古川の水路を渡る橋も造りました。素人のわれわれが造った橋としては、割合に立派なものができまして、『すざらん橋』と名前をつけて長老の阿部先生を先頭にして渡り初め式などをやったことなど、快い思い出として残っています。

さて運動場の方ですが、東側半分は五枚程の大きな畠に分れていて、それぞれが五十センチから八十センチ位の段差のある段々畠になっており、西側は広い田んぼでした。取りあえず、東側の畠の郎分を整理しようということになりました。道具はスコップ・てみ・鍬ぐらいしかなく、生徒と一緒にになって、全くの大海戦術で、高いところの土をてみに入れては低いところへ移動させるという、まことに幼稚な方法で、二カ月余りで一応平地らしい状態に造りあげることができました。あらためて「なせば成る」ということをしみじみと感じたものでした。

二十五年間の高校生活の中で、最も強烈な思い出として残っており、しかも生涯忘れることのできない事件が奉職一カ月後に起きました。それは、昭和三十二年四月三十日の火災のことです。

その日は、ちょうど火災予防週間の日になっていて、当日たまたま学校でも火災訓練をする事になっていました。時間を予め定めないうで、突然に火災発生の場合をして、それに対処する訓練をしようということに打ち合わせをしていました。昼食を終え五校時の授業にはいってすぐでした。突然学校長の「火事だ、火事だ。」という声が聞こえました。まさか校長から火災発生の場合が出るとは思っていませんでした。とにかく訓練のためのものだとばかり思っていました。「火事だ。」の連呼がつづいたのですが、あまりにも真に迫っていますので、これは本ものではないかと思っていそいで外に飛び出しましたが、全然どこにも煙は見えず、火事らしい様子はありません。そのうちに二

階建ての校舎から授業を受けていた生徒が飛び出して来ました。「火元はあそこだ。」というので、小田先生と二人で二階へ上って見たのですが、火事らしい様子はないのです。どこだろうかとあちこちしているうちに、天井から煙が出はじめました。

その校舎は被服教室など六教室と衛生室があり、ミシンが数十台、その他理科器具、家事実習器材などがあつたのですが、できるだけ取り出そうと思ひまして数人の生徒達と一緒に運びはじめました。現在とちがつて、当時のミシンはかなり重いものでしたが、二階から下へおろすのに私たちはともかく、生徒がよく運んだものの後から感心しました。天井をまわる火の勢いの恐しさ、ほんの一、二分の間にもう煙が一杯になり、数メートル先が見えなくなり、いそいで外へ出て見ますと、もう真つ赤な炎がふき上がっていました。その日はかなり風の強い日で手のつけようがなく、隣の校舎への延焼をふせぐのが精一杯で、その通路の渡り廊下を近所（主に大和重工の人だったように記憶していますが）の人の助けを借りて、とりこわすのがやっとという状態でした。火元の校舎は全焼しましたが、幸いで一人の怪我人もなく他の校舎への延焼を防ぐことができたのが不幸中の幸いで、約四十分後に鎮火いたしました。当日の中国新聞の夕刊の記事を紹介しますと、

三十日午後一時二十五分ごろ、広島県安佐郡可部町、国電可部駅南方三百メートルの武田学園可部女子高等学校、可部女子専門学校（校長武田ミキ女史）の北校舎二階西端の普通教室天井裏から出火、同校舎一むね（百九十八坪）物置小屋（約十坪）を全焼して同二時頃鎮火した。

同校舎は裁縫教室など六教室と衛生室があり、ミシン三十五台のほか、理科教材、家事実習具などが焼失した。損害一千万円。原因は漏電ではないかとみられている。なお同校の生徒数は四百名で、残った校舎は普通教室四教室一むねと寄宿舎一むねがあるが、明日からの授業は野天でも続けたいと学校当局では語っている。

出火した教室で高校二年生の授業をしていた内藤昭子先生は次のように語った。

授業をはじめて間もなく教壇下に座っていた生徒が「火事だ」というので驚いて教壇後の天井を見たところ、板のすき間から真赤な火が見えたので驚いて教室を飛び出し、電気のスイッチを切って大声で「火事だ」「火事だ」と叫びました。

この記事の中にもあるように、校長は明日から野天でも授業をするといっていました。さすがに翌五月一日だけは後始末のために授業を休みました。五月二日から残った二つの校舎で、平常通り授業をはじめました。

一方、放課後の時間等を使って一部父兄の力を借りながら、職員生徒一丸になって火事跡の整理をしていきました。

こうした苦しい状態になったときには、何もいなくても生徒たちの愛校心は燃え上って、ただ黙々と後始末に精を出ただけでなく、緊急生徒総会を開いて失われた教材・教具などをとのえる資金の手助けをしたいと申し出て、私たちを感激させました。

そして町内の方々の協力もあって、麦刈り、田植えなどの農作業を手伝ってかなりの資金を得てくれました。私たち職員ももちろん黙ってはおれませんで、そうした生徒の作業と一緒にすると共に、移動映画を計画して近くの中学校にお願いしたり、また父兄の協力で生徒の出身地などへ重い映写機・フィルムを持ち歩いて映画会を行い、一日も早い復興を願って一丸になって努力しました。その間いろいろな失敗談もありましたが、これらの一つ一つが今では快い思い出として残っています。

校地の半分の田んぼに六月には稲を植えて、秋にはかなりの米を収穫しました。刈り入れ、稲こぎ、もみ摺りなども全部皆の手でやって、はじめての米を炊いて皆で会食して喜んだものでした。焼けて真黒になった木材で校地の一

角に十二坪の物置場を、こうした仕事には全く素人の小田先生と私とで、生徒にも手伝ってもらって建て上げたときの感激、嬉しさは、今でも残っている大きな思い出の一つです。

こうした多難な年が終わってその年の十二月三十一日に新校地に第一校舎が竣工し、翌年の一月三十一日は旧校舎へのお別れの式で、全員感謝の意を捧げると共に、万感の想いを残して新しい校舎に移って来ました。生徒会長の持った校旗を先頭にして、教職員・生徒が列を組んで喜びを胸一杯に行進して移転行事を行い、中島校地での高校生活が始ったのです。

私の二十五年の生活の中で、こうした最初の一年間が全体の半分にも相当するくらい、ずいぶんいろいろなことがあり、最も忘れられない期間でした。

その後昭和三十四年に新しく商業科・別科が設置され、昭和三十六年には鉄筋三階建の本館が竣工、その他の建物も充実し、昭和三十七年可部女子短期大学設立に伴い、高校名も可部女子短期大学付属高等学校と改称され、普通科も設置されて生徒数も七百名になり、目覚ましい発展をして参りました。昭和四十一年には広島文教女子大学が設立され、校名も現在の広島文教女子大学付属高等学校となり、大学・高校一貫教育の充実を目指して、限らない未来への発展を秘めて今日に至っていますことは、学園に職を奉ずるわれわれにとって、この上ない喜びであります。

(武田学園理事・前広島文教女子大学付属高等学校長)